消防と防災　SF プロトタイピング

コモングラウンドが繋ぐもの

玉野川地区河川氾濫、消防隊員・地域消防団連携ルポルタージュ

> 「ぼくらは戦いではなく、小さな交渉を続けていくだけなんです。都市や人を飲み込もうとする自然と、ぼくら人間との間の」。玉野市消防団第三分団長の兵藤ミズキ（45）は語った。

2045 年 8 月 25 日 18 時丁度。気温 34.2 度。青白い光が、指令室に灯った。
「消防システムより通達。予報、2045 年 8 月 25 日 18 時 30 分頃、東京は玉野川流域にて、局地的大雨の発生。20 分で 1.3m の水位上昇が予想され、周辺街区に氾濫の恐れあり」

オペレータの声が響く。地図上に可視化された水害の被災予測が指令室の全体ディスプレイに共有された。直ちに消防隊員及び地域の消防団員の個人デバイスにも最新データが送信される、出動指令と同時に当該区域市民全員に避難指示がなされる。

数メートル先が見えないほどの豪雨。雨音はごうごうと響く。その音に負けないように避難指示の防災放送が鳴り渡っている。「来たな」。玉野市消防団第三分団長の兵藤ミズキも、イヤーデバイスから連絡が入ると同時に、XR ゴーグルを掛け、レンズ越しに夜の街を睨んだ。消防団本部からおよそ距離 2km、ピン刺しされた地点の予測を確認する。「指令より通達。消防隊員到着に先駆けて、現地に赴き詳細な被災状況・避難状況を把握次第データを送れ」と号令をかけると、詰め所に待機していた団員たちが掛け声とともに一斉に立ち上がり、揃いの消防団法被の肩のラインがネオンのようにぼんやりと赤く光り出す。法被は、シューという音を立てて水難救助用に空気を含み始めた。出動だ。

同日 18 時 5 分。市民が撮影した写真や動画、通称〈野次馬データ〉が AI によって選別されながら、空間情報プラットフォーム〈コモングラウンド〉に次々と追加されていく。各消防団員のゴーグルに表示される現場状況の XR 空間は、ジグソーパズルを埋めるように組みあがっていく。リアルタイムの気象データを掛け合わせることで、浸水深予測がアップデートされていく。

同日 18 時 10 分。消防指令センターの指令員が地図上の道路を指でなぞると、道路ネットワークのステータスは変更され、そこを走っていた自動運転車が蜘蛛の子を散らすように離れていく。すでに市民の避難は始まり、通りの人気は少ない。サイレンが鳴り響き、自動販売機は飲み物の代わりに避難経路を表示している。そこを消防車が赤い軌跡を残しながら走り過ぎていく。

「アップデートされ続ける現場の状況を見て、まず逃げ遅れのことを考えました」玉野市消防団第三分団員の鈴木アキラ（28）が語る。「消防署はひとつの拠点で複数の地区を広域に管轄しているため、どうしても現着（現場到着）に時間がかかってしまいます。だから我々地域の消防団が先に現着し、市民の避難状況を確認するなどの初期活動を行います」。

同日 18 時 20 分。事前の予測があっても、身体が不自由な人、情報格差がある人は逃げ遅れてしまう。消防指令センターでは、各避難施設にいる避難者と住民リストを照合し、逃げ遅れている人がいないかを探す。コミュニティセンター、小学校……、そのどこにも避難していない一人暮らしの高齢男性を発見した指令員は、すぐさま現着している消防団に連絡。消防団の鈴木さんが地図上にマーキングされた地点の家屋にドローンを飛ばすと、住居二階に人の姿を確認した。「一人暮らしの高齢男性……？ あっ、北村さんだっ」と消防団員の誰かが声をあげた。住民リストに記載された情報と団員の言葉によれば、彼は介助を必要とする要救助者だ。しかし、すでに水位は上昇しており、訓練を受けているとはいえ、高度な装備を備えてはいない消防団員が救助にかかると二次災害のおそれもある。焦りの中で、複数の対応パターンを確認する。消防隊員が間に合わなかった場合には、彼ら団員が最後の砦となる。ピピピピ、とアラームが消防団員の危険を知らせる。そして、豪雨と、水の流れる音だけが響いている。

同日 18 時 31 分。水陸両用車が現着し、消防隊員が次々に降りてくる。団員たちと目が合う。赤い法被をまとった者たちと消防服に身を包んだ者たちが顔を寄せる。言葉を二三交わす。そして、互いに頷き合う。消防団はその場を離れる。アラームの音が遠ざかっていく。彼らはさらに逃げ遅れたものがいないか、探索を続ける。

「わたしたちにできることは限られてはいます」。玉野市消防団第二分団員の東村カレン（33）は真剣な眼差しで話している。「わたしたちは消防のプロフェッショナルと言えるまでには十分な訓練を積んでいません。みなさんが思い浮かべるよう

な救助――要救助者を背負ったり、助け出す瞬間――に立ち会うことは少ない。わたしたちは消防隊員にはなれません。しかし、わたしたちは消防隊員にはなれないがゆえに、わたしたちにできることがあり、彼らより得意なことだってあるのです。なんてったって地元の団員なのですから……どこに誰が住んでいるか、生活しながら日々挨拶しているんですよ」

同日 18 時 33 分。「視界不良。しかし、消防団員が放ってくれたドローンは要救助者の位置を随時送ってくれている。彼らが計算した避難ルートの A を採用。救助開始」。消防車内のナビ担当、松浦レイカ（35）の声が聞こえると、隊長の竹下ミカ（40）始め消防隊員たちが行動を開始した。ナビは消防隊員たちのゴーグル視界・発話・バイタルサイン・位置を把握しながら、現場救助活動を鳥の目と虫の目でサポートする。

「消防団と消防隊員の関係は、たんなるアマチュアとプロフェッショナルではないんです」松浦レイカの言だ。「わたしたち消防隊員は広域を管轄しているがゆえに、消防団の皆さんほど街を把握できてはいません。そんなときに頼りになるのは、彼らが集め、まとめてくれる避難ルートであり、彼らが残してくれる重要な情報です」「たしかに、現在、テクノロジーの進歩によって、わたしたち消防隊員が情報不足で悩むことはありません。いえ、むしろ、情報に溺れそうになることさえあるのです。そんなとき、必要なのは「何が重要な情報なのか」、肌身で分かっている人々の目線・注意・言葉なんです。それを与えてくれるのは、他でもない消防団の方々なんです。ナビという仕事をしていると、消防団の役割の重要さは身に染みて分かりますし、消防隊員仲間のうちで、消防団への尊敬が足りない奴は……」松浦は不敵に笑った。「もう一度徹底的に鍛え直す他ありません」

同日 18 時 42 分。「こちら大久保、要救助者を発見した。思ったより階段が狭く、活動ができない。要救助者を搬出するのに手間取りそうだ」。消防隊員の視界と音声はコモングラウンドに送られ、全消防隊員および全消防団員に共有される。息を飲み見守る消防団員たち。「了解。増水のスピードが和らいだ。北村さんの身体的、心理的負担が最小限のルートＣを採用」

同日 18 時 50 分。逃げ遅れた北村さんは無事保護され、消防団員により避難所へと移送される。活動終了のコールが全消防隊員および全消防団員に通達された。

「それをリアルタイムで聞いてほっとしました」玉野市消防団第三分団長の兵頭が再び語る。「北村さんとは、数年前にたまたま地域の催しで出会って、なんとなく年の離れた友人として気が合っていたものですから……消防隊員の彼らは、活動終了をぼくらにも真っ先に知らせてくれます。その文字がわたしには何よりも勲章のような、称賛のような……嬉しい限りです」

＊＊＊

「どうでしたか？ コモングラウンドに記録された先日の水害は？」
ゴーグルを外した私に、穏やかな声がかけられた。わたしはゆっくりと外し髪を振りほどきながら、ほうっとため息をついた。
「まるでその場にいるみたいでした……そのままルポルタージュが書けそうなほどに」
「現役の新聞記者の方にそう言っていただけると言葉の重みが違ってきますね」
彼女はほほえみながら、お茶を取りに行きますね、と言って席を外した。

わたしは、最新の消防・防災をテーマとした連載記事の取材のために、東京消防庁本部を訪れていた。災害救助におけるコモングラウンドの活用——隊員の行動含む蓄積されたログデータを再生することで、防災研究・施策立案、消防隊員・消防団員の訓練、各種 AI の学習に使うというもの——その実態を体験して、消防の新しい未来を目の当たりにした思いだった。

「まさに今見ていただいたものと同等のものを、消防隊員と消防団員の方々にも見ていただきます。その後、振り返りのシミュレーションを行い、それを報告書として、互いへの要望、そして、もちろん労いと称賛も交えつつ記録するんです」
あたたかいハーブティの香りを嗅ぎながら、わたしは声を聞いていた。
「でも、消防団のイメージが思っていたものと違っていて驚きました。わたしが過去の記事を調べたところでは、過去の消防団は過小な装備と訓練で災害に単身挑む、というイメージでしたから」
「ええ、様々な人の努力のおかげで、今の消防団のあり方は、より透明なものになったと思います。同時に、消防隊員との連携における役割が明確化されて、責任が増えているとも言える」
「そうですね……失礼ながら、記者として気になるのはそこでもあります。実際、彼らの安全をもっと保障するべきだという指摘もありますよね」

彼女は頷きながら、微笑みに陰りをみせた。
「あなたはいま体験していただいた映像に何を感じましたか？」
「そうですね……。わたしは、行政・自治体と市民の新しい連携の姿を垣間見ました。行政だけでできることは、少なくなっている。かといって、市民だけに責任を負わせることは過酷な状況を生み出してしまう。公助と共助のバランスはとてもむずかしいですが、丁度良い地点を探し続けようとする試みなのだとわたしは理解しました」
「おっしゃる通りです。今回は特にうまくいった例ですが、被災者・二次被災者含め、被害をゼロにすることは難しい。ですが、ゼロに近づけていくことはできる。少なくともわたしたちはそう考えています」
そして、少し遠くを見つめてから、さっとわたしを見つめた。
「ぜひあなたとともに考えていけたらうれしい限りです」
わたしは、未来を見据えるその眼を見つめながら、ゆっくりと頷いた。

（終）